金赤の陽

翠川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金赤の陽

【Ｎコード】
Ｎ７６２９ＢＣ

【作者名】
翠川

【あらすじ】
奈子は大学へ希望を持って入学したが、「知り合い」とのおしゃべりに苦笑いをしつつ心にも無い褒め合いをする青鈍色をまとった窮屈な日々を過ごしていた。２年に進級し、新しく出会った「友達」と呼べる人達とともに心の奥にしまった枯れかけの植物たちに水を与えていく。

1

奈子は本を読んでいた。「明るい日」という本で、高校まで内気でさえなかった少年が大学に入ってマラソンを始める。自分でも気付いていなかった才能が開花し、最後には新しく出来た仲間と共に箱根駅伝を走り抜くというストーリーである。高校生の頃学校の図書室で読んだこの本は奈子に希望を与えた。大学に行けばこんなに明るい生活が待っている、今の自分には想像もつかない様な才能が目覚めるはずだ、と。その日の学校帰りには駅の近くの本屋で「明るい日」を買った。大学受験にくじけそうになった時は読んで自分を奮起させた。勉強が苦手な奈子が地元では名の通っている蒼台大学に通えているのも「明るい日」への憧れというのが1つの理由である。

電車のアナウンスで顔を上げた。「明るい日」をカバンにしまう。この駅は周りには豪華な住宅街が並んでいるだけだから降りる人は少ない。乗ってくる人のほとんどがブランド物のスーツを着ているサラリーマンだが、その中にラフな格好の女を見つける。1人だけジーパンにTシャツにジャケットを着ているが、多分一つ一つがいい物を着ているんだろう。貧乏臭く見える事なんてない。旦那を見送りにきた若い妻にも見えそうだ。背はすらっと高く化粧っ気はほとんどない。濡羽色の長い髪は1つに束ねられていて、耳には奈子でも分かるブランドのピアスが光っている。この子は素材がいい、といえばいいのだろうか。いいお肉は塩コショウだけで焼いても美味しい。

「おはよう。凛ちゃん。」

「おはよう。」

奈子は吉岡凛の荷物を受け取って膝の上に乗せる。この駅は大きなショッピングモールのある終点まで3駅しかないほどの近さなので電車の席が空いている事は日中でもあまりない。今朝も席は全て埋

まっていたのでブランドスーツのサラリーマン達は吊革に掴まり携帯をいじっている。株価でもチェックしているのであろうか。凛もサラリーマン達に混じって奈子の前にある吊革を掴む。奈子の最寄り駅は始発駅なので１０分程駅で待てば必ず座ることができる。奈子が座って凛の荷物を膝の上に乗せて大学の最寄である終点まで行くというのはこの大学入学後の１年で習慣となっていた。

「今日は何読んでたの？」

凛に聞かれる。凛の最寄り駅に着くまでの間本を読んで過ごすというのが奈子のもう一つの習慣になっていた。

「これ。もう何回目だろって感じなんだけど。」

栞を挿してある「明るい日」をカバンから出す。もう何度読んだか分からない程読んでいるから本のカバーはぼろぼろになってしまったのでこの前捨ててしまった。

「本当に好きだよねその本。高校の頃から読んでたでしょ？そうだ。今日から二外と体育の授業始まるね。」

呆れ気味に言われる。少し耳が熱くなった気がしたけどほおっておいた。

「１限からだよね。凛ちゃんはドイツ語でしょ？凄いなあ……。」

「そんな事ないって。奈子の中国語の方が凄いよ。私、漢字苦手。」

奈子と凛の通う蒼台大学文学部は大学２年になると第二外国語（略して二外）と体育の授業が始まる。

最初は体育が必修だなんて愕然としたけれど座学と実技で選択式なので安心した。ニ外はドイツ語、フランス語、スペイン語、韓国語、中国語から選択できる。十数年前まではフランス語とドイツ語が人気だったけど、最近は中国語の人気が上がってきていると入学時のオリエンテーションで聞いた気がする。終点についたので人波が落ち着いてから２人は電車を降りた。

　この駅は徒歩１０分の所にアクアリゾートというショッピングモールがある。駅前にはバス停が沢山あって、その中の一つから蒼台大学までの無料バスが１５分おきくらいに出ているので毎朝学生が

長い行列を作っている。だけど奈子も凛もバスは苦手だし駅から大学までは２０分程歩けば着くので歩いていく事がほとんどであった。朝から排気ガスを吸いながら歩くのは苦痛かもしれないが、大学に行く途中には海があって、駅から海までは木が沢山植えられている遊歩道を歩けるから毎朝潮風を嗅ぎながら登校することができる。この海は有名な観光地ではないが夏は地元の小中学生で賑わっている。きっとアクアリゾートの名前もこの海から取っているんだと思う。

「じゃあまたお昼に食堂でね。」

大学に着いて凛と別れる。奈子は自然と溜息をついていた。視線は自然とこの前奮発して買ったこげ茶色のブーツに向かう。大学は窮屈だ。入学してから1年かけてできたのは友達というより知り合いと呼ぶのがふさわしい様な人達だった。苦笑いだと思われない苦笑いが上手くなったような気がする。女はとりあえず群れる事が多い。1人になるのが怖いのではなく、周りから1人でいる事を見られて哀れまれるのが嫌なのだ。

「おはよう。奈子ってニ外中国語だよね？一緒に教室行こうよ。」

声を掛けられる。こうしてまた女は群れていく。

2

ニ外の教室はA棟の3階だった。蒼台大学は総合大学だが文系と理系でキャンパスが分かれている。文系のこのキャンパスはA、B、C、D、E棟の5つの建物から出来ていてそれと他に図書館がある。縦に長いというより横に長く、体育館2つとテニスコートと陸上用グラウンドと室内プールが完備されている。敷地の中心には大きな広場があって木のテーブルとベンチがあったり花壇があったりしていてまるで公園みたいだ。実際、近くにある保育園の子供達や近所の老人たちが散歩に来たりする。週に何回かは合唱サークルが外で練習しているのを見たことがある。大学の生協ではこの広い敷地内での快適な学生生活をうたって自転車を販売している。

「今日辞書持ってきた?私忘れちゃったんだよね。どうしよう。」

「私持ってきたよ。きっと席近いだろうからもし使う事になったら貸してあげるよ。」

佐藤恵里は文学部英文学科で日本文学科の奈子と学科は違うが、で名前順が近かったので1年次の語学の授業で知り合った。

「奈子ありがとう!それにしてもA棟遠いね。今はまだいいけど夏は汗だくになりそう。焼けるし汗かいたら化粧落ちるじゃん。嫌だな」

一息に言った。これは明らかに同意を求めている。女にはよくある話だ。

「本当だよね」

上手い返事が思いつかなくて一言しか言えなかった。恵里は機会がある度に話し掛けてくるのだが奈子は恵里にどこか苦手意識を持っていた。奈子に言わせると恵里には人を見捨てるのが早くその人に対して救いの手を全く与えないところがある。1年の9月頃であっただろうか。効きすぎる冷房でお腹を下しそうになっていた記語学の授業中である。恵里の隣に座っていた女子学生が教科書を忘れて

しまっていて恵里に見せてくれるよう頼んだ。その場では笑顔で見せていた恵里だったが、後に「忘れ物をする人なんて最低！もう2度とあの子の隣なんて座りたくない」と漏らしていたそうだ。1度の失敗をそこまで追及するものなのだろうか。1度くらいいいのではないか。実際、それまでその子はずっと恵里の隣で教科書を忘れたことなんてなかった。それからはどこかで気をつかってしまう。恵里に見捨てられてしまったらニ外の授業が辛くなる、哀れまれる、と思った。語学の授業では周りの人間とコミュニケーションをとる機会が多いことを去年1年間で奈子は思い知っていた。

「恵里ちゃんのそのピアス可愛いね。今日の格好に凄い合ってる。」気まずい空気になる前にとりあえず恵里を褒める事にした。入学当時に黒かった恵里の髪の毛は夏頃には明るい栗色になっていた。長さは胸くらいの長さで、パーマだろうか、ふわふわしている。

「あ、これ？ありがとう。」

褒められて嫌な女はいない。女は周りから見られる事を考えて髪を染め爪を塗り化粧をする。自分の好みより周りの大多数の好みを優先事もある。面白いことにこの大多数とはほとんどの場合が男ではなく周りの女の好みなんじゃないか、と疑ってしまうこともある。恵里は髪を耳に掛けてゴールドのリボンの形をしたピアスをいじる。いじっている爪は綺麗な桜色のネイルが塗られていてその上にラインストーンが貼られている。奈子は恵里の格好にはゴールドよりシルバーのピアスの方が合うと思ったが黙っておく事にした。

ニ外の教室は高校の時の様な教室で、黒板があって前に教卓があってその後ろに机が並んでいる。1番始めの授業は名前順に座るみたいだ。

去年と同じで私の前の席はきっと恵里だろう、そう思っていた。しかし、ここで想定外の事が起こった。私と恵里の間に誰かがいた、という訳ではない。私の想定どおり佐藤恵里の次は鈴木奈子で私だった。だけど席数の関係で恵里は一番後ろで私は一番前の教卓の前の席になってしまった。奈子の周りの席の人はまだ誰も来ていない。

その時、ニ外中国語だったんだ。1年間よろしくね！という恵里の声が聞こえてきた。振り向くと恵里は友達を見つけたようで安堵の表情で楽しそうに喋っている。恵里の考えてることが手に取るように分かる。奈子はその子に見覚えがあった。いつも恵里と一緒にいる子だ。学食で何度か見たことがあった。恵里と目が合いそうになって急いで前を向いて席に座った。メールを受信していない携帯を取り出して受信フォルダを眺める。朝に来たお天気メールを読み流す。花粉に注意。これは私の微かなプライドだ。恵里が他の友達と喋っていても私は大丈夫。それにしてもまだ来ないのかなあの子は。どうしたんだろう。風邪でもひいたのかしら。もしかしたら花粉症がひどくて病院に寄っているのかもしれない。新着メール作成画面を表示する携帯電話。

――――――どうしたの？大丈夫？もう授業はじまるよ――――

はじまるよの変換を行おうとして馬鹿らしくなってやめる。終了ボタンを連打して携帯を閉じる。こんなくだらない事をしてる間に周りの席が埋まっていた。両隣は男子のようだ。絶望的だと思った。

中国語の先生は初老のおじいさんで簡単な自己紹介として自分の名前を黒板に書いた。

「岡　清士といいます。大学時代に2年間中国へ留学してました。今年1年間中国語を教えます。基本的なレベルまでしかできないと思うのでもっと上達したいと思った人は3年次の授業もとってください。今日は初めての授業という事で、身近な物から中国語の面白さを知ってもらおうと思います。」

丁寧な口調で言って先生は窓側の列から白い紙を配り始めた。先生から紙の束を受け取る。1枚取って残りを後ろの人に回そうとして振り向く。やった。後ろは女の子だ。僅かな時間しかなかったが栗色の長い髪の毛が確認できた。席の周りが男子だけという最悪の状況は逃れたみたいだ。紙は折り紙くらいの大きさでリサイクル用紙のようだった。裏側に今年の入学者の為のオリエンテーションについての注意事項が記載されている。

「皆さん紙は手元にありますね。では、氏名を書いてください。そしたら紙の左半分に名前を書いてください。苗字は書かなくて結構です。楷書でなるべく丁寧にお願いします。皆さん今日は辞書を持ってきましたか？辞書で自分の名前の漢字の意味を１つ１つ調べてみてください。例えば私の場合ですと、清という字は皆さんご存知の通り清らかという意味があります。汚れてないという意味ですね。辞書で調べてみます。すると清らかという意味とは別に涼しいという意味があるのが分かります。そして士という字ですが、この字は士農工商に使われるように武士という意味があるのは皆さんご存知だと思います。では、なぜ私の母上はこの士という字を名前に使ったのでしょうか。母上は私に清らかな武士になってほしかったのでしょうか。まあ、私が生まれたのは戦時中ですからこの可能性は無きにしも非ずですが。しかし、戦争がないこの時代でもこの士という字は名前に使われています。この教室の中にもこの字が使われている人がいるかもしれませんね。そこで辞書で調べてみます。そしたら出てきました。この士という字には武士という意味の他に立派な男子という意味があるんですね。きっと現代の人達はこの意味をとってこの字をつけたのでしょう。このように、１つの漢字に沢山の意味があることが分かると思います。皆さんも自分の名前について調べてみてください。きっと予想外の意味が見つかると思います。調べ終わったら周りの人と見せ合ってみましょうか。」

鈴木奈子。奈子。この頃の子供は一目では読めないような名前が増えてきたという。読めない事が一種のステータスになると考える母親もいる、とお昼のワイドショーで見た。一発で読める陳腐な名前なんてつまらない、そんな名前をつけたくない、という事らしい。白髪で黄土色のスーツを着ていたコメンテーターが最近の親は何を考えているのだと唾を飛ばしながら憤慨していた。子供の名前はペット感覚で名付けるものではない。何となく可愛い、かっこいい、でつけるものではない。よくある名前とは昔から何人もの親が子につけてきたようなものである。母は洗濯物を畳みながら、ほんとよ

ねえと頷いていた。
　電子辞書を鞄から取り出す。電源ボタンを押して息を吐きながら背もたれに体を預ける。これは起動するまで少し間がかかる。合格が決まった年の春休みに母が買った。1年前のことだ。二外で何を学ぶか選択するのは入学後だった。秋に1回調査票を提出しその後人数調整を行う。十数年前まではドイツ語とフランス語の人気が高く人数調整が必須だったが、最近は中国語の人気が高まってきた分ドイツ語フランス語の人気が序々に下がってきので人数調整の必要が少なくなってきたらしい。1年前、奈子はドイツ語と中国語で悩んでいた。どちらも魅力的だった。最終決定まではあと半年ある事も知っていたので、じっくり考えればいいと思っていた。しかし、あともう少しで入学式という3月の下旬、その日は雨がひどくて私は家に篭っていた気がする。家にダンボールに包まれた電子辞書が届いたのだ。母は「大学生になったら新しいのが必要になるってずっと思ってたのよねぇ。それで昨日テレビ見てたらね、丁度電子辞書売ってて。これは絶対買うしかないと思ったのよ」と言いながらハサミでダンボールをこじ開けていた。きっとお昼のワイドショーの間に流れてた通販番組だ。私は溜息をつきながら取扱説明書を受けとり読んだ。そして気付いてしまった。この辞書にはドイツ語の辞書が搭載されていない。中国語とフランス語とスペイン語しかない。母はきっと何も気にせず値段と「電子辞書」という名だけ見て購入を決めてしまったのだろう。私がニ外で何を選択するかなんて考えていなかったのだろう。もしかしたら、大学にニ外がある事もこの時はすっかり抜けていたのかもしれない。母は昔からこうだ。思い立ったらすぐに行動する。母の口癖はこうだ。「すぐ行動しないと忘れちゃうのよ。それに次思いつける保証なんてないじゃない？思いつくってことは神様がやれって言ってるのよきっと」なんと言うべきなのだろう。良く言えば、行動力がある。悪く言えば、猪突猛進。母は猪年だ。去年厄年だったらしく、いつもは近所の神社なのに電車で何時間もかかる有名なお寺に初詣に行きたいと言い出

した。電子辞書をもう一つ買うのも、1冊ドイツ語の辞書を買うのも無駄にお金がかかってしまう。それなら、中国語を選択しようとあっさりと決めた。というのも、こういう事はよくあったのだ。どうしようか悩んでいると、母の突然の思いつきの行動で片方の道が閉ざされてしまう。そしてその選択はあとから考えると正しいことのように思えるのだ。

漢字辞典のボタンを押す。大きなブロック体の文字が映される。その時、肩に何か感じた。霊ではない。そういう類の物は生まれてから一度も感じたことはない。きっと後ろから肩をぽふっと叩かれたのだ。振り向いて確認してみよう。ただ、もし勘違いだったらどこに視線を泳がそうか。恵里が友達から辞書を借りてるのを見てやろうか。右側だけの口角を震え上げながら。

「ごめん。えっと、あのさ。私さ、辞書忘れちゃったんだ。貸してもらえないかな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7629bc/

金赤の陽

2012年10月18日16時00分発行